「系」と「風」の新奇用法について

中　島　晶　子*

１．はじめに

若い世代の使う言葉にぼかし表現が多いことはよく指摘されるところだが、その動機や造語法自体には格別新奇なものがあるわけではない。日本人が婉曲表現を好んで使う傾向は従来からあり、新奇な変化は、ネットなど言語使用場面の多様化に伴う、語の意味や機能の拡張という語彙レベルで主に観察されると言える（Cf. 井上2005）。

さて、コンソーシアムのテーマである「日本とは何か」という問いを考えるにあたり、これを日本語の視点から捉え、新奇用法に見られる決して新奇でない意味作用を通して、日本語の文化的側面を探っていく。

本稿で取り上げるのは、次のように文に挿入された疑似会話に引用マーカーとして後続する「系」と「風」の新奇用法である。

(1) 頑張って書きました！｛系の／風の／的な／みたいな｝文になっちゃって。

これはメイナード（2004）が類似引用と呼んだもので、こうした類似引用構文に現れる引用マーカーはそれぞれ類義的に使われるが、ぼかし表現として異なる意味合いをもつ。

以下では、まず、先行研究をもとに、(1)のような類似引用の性質について確認する。次に、類似引用構文にどのような引用句が使われるかを観察する。そして、類似引用マーカーのなかでも先行研究が少ない「系」と「風」を取り上げ、両者がもつ意味作用の共通点と相違点を考察する。例文は、ネットでの収集例を簡略化したもの、または、それに他の接尾辞をあてたものである。

２．先行研究

類似引用についてメイナード（2004：184）は、「導入する会話表現（直接引用部分）が発話されるような状況を呼び起こしながら、その会話表現をそのままではないが類似しているものとして模倣提示する技法である」としている。

(1)では、引用句の内容が話者の言わんとする内容と類似していることを示すと同時に、類似しているが同じでないことから発話内容から距離をとった婉曲的効果を生んでいる。婉曲表現は、聞き手や自分の発話内容との間に距離を置いて丁寧さを表したり、自分の発話に対する責任をあいまいにしたりする意図や効果があるが、新しいぼかし表現について陣内（2006）は、そのほかにも「緩くて遊びのある表現の方が場の雰囲気を和らげてくれる、という表現効果をねらってのこと」と説明している。一方、類似引用の機能についてメイナード（2008：81）は、「直接話法的な引用をすることに関連して、場の交差、声の多重性、視点の混合、会話表現がもたらすドラマ性や臨場感の強化、コンテキストの操作、話し手の内面を露にするなどがある。同時に、「みたいな」「的」「系」の意味に関連して、躊躇感、ぼかし、責任逃れ、ソフト化などの機能もある」と述べている。

では、話者が創り上げた疑似会話を引用すると

＊パリ・ディドロ大学准教授

いうのはどのような概念操作なのだろうか。これについては、パースの記号分類を援用し引用の特性を指摘した藤田（2000）の考察が示唆的である。藤田（2000：58）は、通常の言語表現がシンボル記号であるのに対し引用表現はイコン記号であるとし、次のような説明を与えている。「引用されたコトバとは、表現されるべき対象世界において所与のコトバが、実物表示されて、つまりは、類似的に模写・写像されて出てくるものであった。いわば、模写・写像されて再現された対象世界の一断片である」。また、イコンである引用表現は、通常の言語記号とは異なり、その品詞的役割は相対的に付与されるとしている。

対象世界の一断片である引用句には、実際の発話に限らず、発話者同士が共有する文化的知識から取り出した決まり文句やありそうなセリフなどもある。それが統語的制約を受けないイコンとして文に挿入されたのが類似引用だと言えるだろう。

例えば、(2a)では独立文である決まり文句は、(2b)では文述語的に、(2c)では名詞的に解釈され、(2d)のように漢語接尾辞が後続する例もある。さらに、(3)のように名詞用法が定着したものもある。

(2) a．いいのないな。もうこれでいいや。
　　b．好きなもの選んでって言っても、すぐ、あ、もうこれでいいや。
　　c．もうこれでいいやにしておけば？
　　d．もうこれでいいや風に言う。

(3) a．「まさか！」と思った。
　　b．まさかが本当になった。

類似引用の機能や表現効果は、引用句がイコンとして自由に発話に挿入でき、話者の表現意図に沿って引用句を操作できるという点に基盤があると言えるだろう。

3．類似引用表現における引用句の特徴

以下では、類似引用句にどのようなものがあるか観察する。前節で見たように、類似引用句は実際の発話ではなく、発話者間の共有知識の中から、特定の状況を喚起する決まり文句や典型的なセリフを借りてきたものである(1、2d)。他の例として、挨拶などの定型表現(4a)、特定の場面と結びついた擬音語・擬態語(4b)、描写文のステレオタイプ(5a)などが見られる。漢語接尾辞が引用マーカーの場合は、一語形式をつくる(5b)。

(4) a．（自分を知っているはずの人に）はじめまして風の挨拶をされた。
　　b．（トラブルが深刻なものでなく）「チャンチャン系」で助かりました。

(5) a．宇宙人が地球を侵略する系の映画
　　b．宇宙人侵略系SF映画の古典

こうしたなかには、類型的な出来事の経過を表すスクリプトを喚起するものも少なくない。例えば、(2)の「もうこれでいいや」では、手に入れたいものを探したが見つからず、他のもので妥協するときに出てくる決まり文句である。(3)の「まさか」は、予期せぬ事態が起きたことを知ったとき、その情報を受け入れられない心境にあることを表す。(4a)の「はじめまして」では初めて会ったとき、その人との距離感を保ちながら挨拶する場面を想起し、(4b)の「チャンチャン」ではある出来事が起こり最初は重大に考えていたが、結局つまらないことだとわかって幕を閉じたという経緯を喚起する。こうした類型的なスクリプトにはそれに対応する決まり文句があることが多い。そのような決まり文句は共有知識のなかにレパートリーとしてあり、そこから個々の事態に合うものを選び、類似するものとして引用する。類似引用はそのまま記せば長くなるスクリプトを短い引用句によって済ます効果的手段である。

ところで、類似引用に現れる決まり文句は、そうしたセリフを吐くときと類似した心理状況を指示することからメタファー的であり、スクリプトを構成する一部であるという点でメトニミー的であり、両方にまたがった操作だと言える。引用句

には感嘆符や音調記号を加えたり、文体の位相を変えたりして発話を演出し、遊びや情緒的な表現効果を与えることも可能である（１など）。

一方、こうした引用句の解釈は、背景知識や文脈に負うところが多く、文化的な文脈依存度が高い。例えば、(5)の引用句は字義通りにとれば大変な状況だが、B級映画に期待される滑稽さが含意されている。また、(4b)の「チャンチャン」はコントの最後に鳴らす効果音であるが、それが肩透かしや期待外れという意味に特化した要因は、この効果音がもっぱら脱力する笑いに使われる点にある。(1)では、字義的には前向きさを表すセリフのステレオタイプが揶揄して使われている。このように、類似引用句の選択および（再）解釈には、レトリック表現がそうであるように、共有知識のなかでも文化的コノテーションに関わる部分が重要であり、類似引用構文はきわめて日本的な表現をつくる形式であるとも言えるだろう。

この点は特定の場面に対応した疑似引用句以外にも見られる。(6a)の固有名詞が合意するものや(6b)の擬態語が当該文脈のなかで醸し出すニュアンス（言い回しのかわいらしさなど）は言外の文化的データに支えられている。

(6) a．村上春樹｛系／風｝の小説
　　b．ソーセージぐるぐる風のパン

４.「系」と「風」の共通点と相違点

最後に、「系」と「風」の類似会話引用以外の用法も取り上げ、それぞれの共通点と相違点を考察する。

漢語接尾辞の語基には本来、名詞（形）が使われるが、新奇用法では他品詞の語のほか、句表現も見られる。句でも漢語接尾辞はひとつの意味のまとまりとして発話に組み込む。

まず、「系」の例から見ていく。語基は順に名詞、形容動詞、形容詞、動詞である。

(7) ｛ハッピーエンド／好き／おもしろい／楽しむ｝系の映画

「系」は、被修飾語が表すクラスの下位カテゴリーの名付けに使われ、語基には、対立概念や相補的概念を含意するものがくる。例えば、「ハッピーエンド」に対する「悲劇」、「好き」に対する「嫌い」、「おもしろい」に対する「悲しい／怖い」、「楽しむ」に対する「（楽しむだけではなく）考えさせられる」などが挙げられる。これらは映画のさまざまな側面における属性を表す。「ハッピーエンド」は物語の類型、「好き」は話し手の趣味との一致度、「おもしろい」は観賞者がもつ感想、「楽しむ」は観賞の目的という観点からみた属性である。このように、品詞がなんであれ、映画に関連した属性として解釈可能なものは語基に使うことができる。

次に「風」の例を見る。語基は順に名詞、形容動詞、形容詞、動詞である。

(8) ｛エリート／まじめ／かしこい／できる｝風の話し方

「風」はある特徴をもった外見や様相から受ける印象を述べるのに使われる。印象であり、カテゴリーを表すわけではないが、タイプ別に分類しようとする気持ちがある。

ここで、「系」と「風」の違いを見てみよう。まず、(8)は「系」も使うことができるが、(7)に「風」を使うと据わりの悪いものが出てくる。

(9) ｛!ハッピーエンド／?好き／おもしろい／?楽しむ｝風の映画

まず、「ハッピーエンド風」は「系」のように物語のカテゴリーを表してはおらず、ハッピーエンドかどうかはともかく、そのような印象を受けるものという解釈が成り立つ。このように語基が対象（ここでは映画）に付与される属性を表す場合は、「風」を使うと、それに類似した印象を与えるという属性を表す。また、「好き」や「楽しむ」など対象そのものの属性ではない場合は「風」は使えない。（ただし、「子供が好き風の映画」では物語類型の類似性を表すので「風」が使える。）

次は「系」と「風」が相補的に使われている。

(10) a．OSをwindows｛系／*風｝にする。

b．windowsをmac｛*系／風｝にする。

(10a)では、どのカテゴリーのOSを選ぶかという話であり、ここでwindows系とはlinux系などと相補関係にあるものである。OSは外観に関わりなく、ひとつのカテゴリーに分類されるものなので、「風」は適さない。また、(10b)では、物自体はそのままで様相だけを変えるので、カテゴリー変化に関わらない「風」が使われる。どちらの例も同じ動詞だが、「系にする」では「選ぶ」という意味に、「風にする」では「変える」という意味になることからもその違いが観察される。

次は、類似引用句の例である。

(11) a．私頑張ってます！｛系／風｝は苦手。

b．どこかで見たことある｛系／風｝の話が多い。

c．たまには何してる？｛系／風｝の話もしてみようと思いました。

d．がんばらなくていいんだよ｛系／風｝の歌が増えてきた。

一見どちらの漢語接尾辞も解釈にほとんど差がないように見受けられるが、両者とも属性の指示の仕方が異なる。「系」はカテゴリーの成員を例示的に指示することによって属性を示すという点で、個体指示的である。ここから意味拡張の方向が複数生じる。(11a)は「いかにも」という典型的成員の属性を、(11b)は「なんとなく」という周辺的成員の属性を、(11c)は「なんであれ」というあらゆる成員の属性を指示するものとして解釈される。このなかで周辺的成員を指す場合は、ぼかし表現としての度合いが高くなり、「風」の意味合いに近づく。一方、「風」は外観や印象によって類似的属性を指示するものであり、個体指示的ではないため、典型的か周辺的かで変わる意味作用はない。個体指示か属性指示かの違いは(10)で見た相違点に通じるものである。

このほかの違いとして、「系」では指示対象を軽視したニュアンスが出ることがあるのに対し、「風」にはそれはないという点も指摘できる。これは、「系」が指示対象の個別性を捨象し、その他大勢とひとくくりにしてカテゴリー化することからくる意味効果だと思われる（例えば(6a)や(11d)）。しかし、これは語に内在する意味ではなくアイロニーのように発話意図と絡めて解釈されるニュアンスである。

このように、両者はもともとの意味に起因する相違点が見られるが、類似表現としての用法ではその違いも中和され、ぼかし表現の様相を呈するようになる。このような傾向は「式」や「的」など他の漢語接辞にも見られ、意味拡張の方向が客観的な意味から主観的な意味へ、さらに語用論的な意味をもつに至る傾向として捉えることもできるだろう（Cf. Traugott：1982）。

5．おわりに

以上、類似引用マーカーとしての「系」と「風」の新奇用法を観察した。まず、さまざまな表現効果をもつこの表現形式が引用のイコニックな性質によるものである点を確認し、次に、類似引用構文が文化的コノテーションを含んだ表現を多くつくる点を見、最後に、「系」と「風」がそれぞれどのように属性を指示するかを考察した。

今後の課題として、コーパスをより精密に分析し、他の類似引用マーカーについても比較、考察することが必要である。

参考文献

井上史雄（2005）「情報化と若者の言語行動」橋元良明（編）『講座社会言語科学２　メディア』ひつじ書房

鎌田修（2000）『日本語の引用』ひつじ書房

佐竹秀雄（1997）「若者ことばと文法」『日本語学』16-4

陣内正敬（2006）「ぼかし表現の二面性―近づかない配慮と近づく配慮―」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
メイナード、泉子・K.（2004）『談話言語学：日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
メイナード、泉子・K.（2008）『マルチジャンル談話論―間ジャンル性と意味の創造―』くろしお出版
Tannen, D.（1989）*Talking voices: Repetition, Dialogue and Imagery in Conversational Discourse*, Cambridge: Cambridge University Press.
Traugott, E.（1982）“From propositional to textual and expressive meanings: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization”, in Winfred P. Lehmann & Yakov Malkiel（eds.）*Perspectives on Historical Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins. pp.245-271.